

アグレッションの肯定・否定的側面及び 方向性を測定する尺度作成の試み

—大学生の場合—

GH081008 : 名城卓哉

指導教員 : 吉田ゆり准教授

問題と目的

狭義の意味での攻撃性、つまり否定的・破壊的な意味での攻撃性については、さまざまな分野で研究が進められてきた。大淵（1993）によれば、攻撃性とは、「他者に危害を加えようとする意図的行動」と定義されている。ここには攻撃性が、意図的行動であり、他者に向けられるものであることが想定されている（安立，2001）。

しかし、Storr, A.(1968)は、攻撃性が破壊的である必要はなく、生命を維持し成長するために必要なエネルギーとして捉え、その肯定的な面について言及している。また、精神分析学派の松木（1996）によれば、自己破壊的行為の病理の背後には、抑うつ感や自責感が中核にあることが多く、攻撃性は自己に向けられこともあるとしている。先行研究では、攻撃は他者に向けられ、そのネガティブな様相に着目した研究は多いが、自己にも方向づけられることや、ポジティブに機能することを踏まえて、攻撃性という概念を包括的に捉える試みは少ないといえる。

こうした背景により、まず本研究では、攻撃性という言葉自体にネガティブな意味合いが含まれることが考えられるため、攻撃性ではなくアグレッションという言葉を用いることとし、以下のように定義する。「アグレッションとは、能動的な力である肯定的側面と、破壊的な力である否定的側面の2面性を持つ。そして、両側面には方向性があり、前者は適応行動を発動させ、自己の外に向かうエネルギーと自己の内に向かうエネルギーとに分けられ、後者は暴力的行動を発動させ、他者あるいは自己に方向付けられる。能動的な力と破壊的な力には、多様な形態があり、両者を包括した力には、生きるための原動力が存在する。」

このように、アグレッションが能動性と破壊性の2側面を持ち、それぞれに2つの方向性があると仮定した。本研究では、これまでの研究の限界点を踏まえ、新たな尺度を作成することを研究目

的とする。質問紙の作成により、心理臨床の現場でこの質問紙を用いることで、クライアントがどのようなアグレッションの諸相を有しているかを把握し、クライアント理解の一助となり、より良い援助を提供できる、という意義があると考えられる。

方法

データ収集方法 青年期においては、攻撃性が「個々の青年の心の中に沈殿していく可能性をもつ（島井・山崎，2002）」という指摘にもあるように、本研究でのアグレッションが、身体的・言語的攻撃行動のような表立った形で表出されることが落ち着き、より内面化することが想定される青年期後期の大学生に研究協力を依頼する。

手続き アグレッションの4つの下位概念に対して、内容的妥当性の検討後、予備調査では、鹿児島県内の私立大学に通う大学生45名（男性11名、女性34名、19～23歳、平均年齢20.31歳）、本調査1では、鹿児島県内の国公立大学に通う大学生578名（男性275名、女性303名、18～28歳、平均年齢19.79歳）に質問紙調査を実施した。2～4週間の間隔をあけて、本調査2を上記の鹿児島県内の国公立大学に通う同一の大学生のうち369名（男性164名、女性205名、18～28歳、平均年齢19.68歳）に行った。

結果

因子構造の検討 内容的妥当性を検討後、アグレッション尺度47項目について主因子法による探索的因子分析を行った。筆者の仮説から4因子と設定し、その後、Promax回転を加えた。次に、当該因子への付加量が.35未満の項目、共通性が.16未満の項目、内容的に重複する項目の片方の合計17項目項目を削除した。残った30項目について再度4因子解で因子分析（主因子法、Promax回転）を行った。回転前の4因子の累積寄与率は、45.21%であった。

第1因子は、積極的に物事に取り組もうとして

いる因子と解釈された。よって、第1因子を「積極性」因子と命名した。第2因子は、自己の非を責める因子と解釈された。よって、第2因子を「自責感」因子と命名した。第3因子は、他者の非を責める因子と解釈することができた。よって、第3因子を「他責感」因子と命名した。第4因子は、深く自己をかえりみようとしている因子と解釈された。よって、第4因子を「内省力」因子と命名した。なお、モデル化の段階では、「肯定的な自己の内面へ向かう能動性」として分類されていた「何事も、できないことは、悔しくてたまらない」が、「積極性」としてまとまった。

内的整合性の検討 尺度の内的整合性を意味する α 係数は、「積極性」で.785、「自責感」で.814、「他責感」で.758、「内省力」で.787と、いずれも高い値を示した。また、全体尺度で.765という値を示し、内的整合性という面で十分な信頼性を備えていることが確認された。

併存的妥当性の検討 アグレッション尺度の全体尺度と安立(2001)の攻撃性質問紙の全体尺度との間には、0.1%水準で有意な相関($r = .622$)がみられた。アグレッション尺度の下位尺度毎と攻撃性質問紙の全体尺度の間には、「内省力」以外の「他責感」、「自責感」、「積極性」において、0.1%水準で有意な正の相関がみられた(それぞれ、 $r = .583$, $r = .460$, $r = .207$)。また、アグレッション尺度の各下位尺度と構成概念が近似の攻撃性質問紙の各下位尺度との間には、全て0.1%水準で有意な正の相関がみられた。

構成概念妥当性の検討・収束的妥当性

自己肯定意識尺度との相関 「積極性」と自己肯定意識尺度の「自己実現的態度」と「自己表明・対人的積極性」との間にも、0.1%水準で有意な正の相関がみられ($r = .647$)、収束的妥当性が確認された。そして、各々の「自己実現的態度」、「自己表明・対人的積極性」においても、0.1%水準で有意な正の相関がみられた(それぞれ、 $r = .649$, $r = .486$)。

自意識尺度との相関 「内省力」と自意識尺度の「私的自意識」との間には、0.1%水準で有意な正の相関がみられ($r = .470$)、収束的妥当性が確認された。

構成概念妥当性の検討・弁別的妥当性 日本版BAQの全体尺度との間には、低い正の相関($r = .365$)を示した。下位尺度毎には、「他責感」に

0.1%水準で有意な正の相関がみられた($r = .645$)。アグレッション尺度の各下位尺度と、攻撃性質問紙の各下位尺度との間には、「他責感」以外は、全体的に低い相関を示した。

男女差の検討 男女差の検討を行うために、アグレッション尺度の各下位尺度得点について対応のない t 検定を行った。その結果、「他責感」($t(552)=3.97$, $p<.001$)について、女性よりも男性の方が有意に高い得点を示していた。「内省力」($t(552)=2.46$, $p<.05$)について、男性よりも女性の方が有意に高い得点を示していた。「積極性」($t(546)=.032$, $n.s.$)と「自責感」($t(543)=.788$, $n.s.$)については男女の得点差は有意ではなかった。

学部間比較 得られた結果が別の集団でも成り立つといえるかの確認を行なうために、3つの学部間で差があるかを検討した。アグレッション尺度の全体尺度得点と各下位尺度得点について一元配置分散分析を行った。その結果、「積極性」において、B学部の方がA学部よりも有意に高い得点を示していた($F(2,555)=6.37$, $p<.01$)。「自責感」($F(2,557)=.687$, $n.s.$)、「他責感」($F(2,555,2.81)=.n.s.$)、「内省力」($F(2,560)=.058$, $n.s.$)、全体尺度($F(2,546)=.574$, $n.s.$)については、学部間での得点差は有意ではなかった。

考察

攻撃性という概念を明確に、かつより広く定義づけることで、新たな視点を提供することができ、この点で臨床心理学という枠組みの中での攻撃性研究について、本研究の果たした意義は大きいと考えられる。本研究での定義に従い、アグレッション尺度を作成し、おおむね信頼性と妥当性を備えていることが確認された。しかしながら、今後の課題も多い。信頼性検討では、経時的安定性に関しては検証することができなかったことから、今後は再検査法を用いた安定性の検討が求められる。妥当性検討では、おおむね検証されたとしたが、質問紙法以外で、当尺度の妥当性を検証することができれば、より高い妥当性を示すことが可能になると思われる。

また、今回の調査で男女差や学部間での差がみられたことから、今後は、アグレッション尺度の男女別の検討や、他の集団で本尺度を適応できるかの検討が必要である。